

H31地域協働研究（ステージⅠ）

H31-I-05 「いわて塩の道 野田街道の歴史と文化の検証」

研究提案者：岩手県盛岡広域振興局経営企画部

研究代表者：盛岡短期大学部 松本博明

研究チーム員：岩淵謙悦・小岩幸恵（盛岡広域振興局経営企画部）

<要旨>

本研究は、沿岸北部の野田村から久慈市（旧山形村）、葛巻町、岩手町沼宮内を経て、盛岡へと至る「いわて塩の道」（野田街道塩の道）について、この歴史的な広域交易道が沿線地区にもたらした文化的、経済的影響を検証して、その成果を史跡の保存活用に資する方法を考察するものである。本年度は、基盤研究として「いわて塩の道」に関わる文献、資料を博搜し、収集する。またこれら資料を格納するデータベースの骨格を作成、今後の資料収集の成果を可視化するプラットフォームを構築した。次いで、「いわて塩の道」沿線市町村に居住する「塩の道」関係者を一堂に集めて情報交換会を開催、主要関連要素（塩の生産、食文化、特に豆腐文化と塩、牛と馬による運搬法と闘牛、交易路としての役割）などについて聞き取りを行い、「野田街道塩の道」全体の概略を活写した。

1 研究の概要（背景・目的等）

塩の道としてかつて利用された街道の一つ、野田村から久慈市（旧山形村）を通り盛岡へと続く野田街道については、製塩の地である野田、荷駄を運んだ南部牛の流れをくむ短角牛の産地である旧山形村地域においては、資料の編纂や民間の取組による道の保全などの活動が行われるなど地域の歴史的な遺産として自認されている部分もある。しかしこうした遺産・資源を軸として、広域的な連携による効果的な取り組みを進めていくためには、野田から盛岡に至る全域の検証が不可欠であり、更には周辺の地域に与えた影響の歴史的・文化的意義を明らかにすること求められている。今後、資料や古道の滅失を防ぐうえでも早急に取り組む必要がある。

また、こうして検証されたいわての「塩の道」を単に歴史文化資源として解説するだけではなく、各時代、それぞれの関係地域の生を支えた産業・流通資源として、普遍的価値（全国のおよび国際的な価値）に落とし込むことによって、新たな価値評価を生み出す機縁となる。

2 研究の内容（方法・経過等）

「塩の道」に関する研究調査、伝承の記録・データ、資料については、関係する各市町村あるいは地区において個別にまとめられ刊行されるなどしている。また、各地区における古老の談話、伝承の聞き書きなどが、地区の公民館報、関係団体の機関誌などに掲載されている。しかし、これらの資料、記事を総合的に収集し「いわて塩の道関係資料」としてまとめる取り組みはほとんどなされていない。

本研究では、まずそうした資料・データの収集を行い、「いわて塩の道関係資料文献目録」を作成し、今後の研究、調査に役立つベースを作ることとする。

次に、実地調査による聞き取り、資料収集、確認などを中心に、「塩の道」に関わる歴史、文化、暮らし（民俗）、産業、流通など、「塩の道」にかかわる様々な事象について、有機的連関を持たせながらとらえ、整理分析する。一

部の分野にとどまることなく、大きな「機能」としてこの道をとらえ、その価値を浮き彫りにする。まとめると以下のようなになる。

1. 現存する資料の収集とまとめ
2. 野田村から盛岡市に至る野田街道の道標、史跡の確認
3. 地域の研究者、有識者への聞き取り

こうした取り組みから、以下の内容を明らかにする。

- ①塩の道としてだけではなく鉄を含めた資源・文化流通の動脈として「塩の道」の新たな歴史、価値を発見する。さらには秋田県、新潟県へと延びる長大な交易道の一端を発掘する。
- ②牛方の風俗、荷駄の取引に係る沿線地域の経済活動への関わりについてまとめる。
- ③現在に続く地域の保全活動の状況を収集し、今後の保全活動の方法に資する。
- ④闘牛等、塩の道が現在の伝統行事や観光、催事に影響を持つ事例の由来を収集し、塩の道が沿線にもたらした文化的影響について明らかにする。
- ⑤取得した資料、データ、さらにはそこから得られた知見を整理してまとめ、今後の研究、塩の道かつ容易に資する。
- ⑥これらの検証結果を県内外に公表発信することにより、「塩の道」の持つ歴史的意義を裏付け、地域において塩の



道の認知度が向上するとともに、所縁を持つ食や風俗を活用した事業者の商業活動の活発化や広域連携、観光への活用による交流人口の増加により地域の活性化に寄与する。

本年度は、上記1、3を実施した。3については、令和元年12月12日に岩手町において関係者20名が参集して「情報交換会」を行い、関係者から多くの情報が寄せられた。

3 これまで得られた研究の成果

【関係文献の発見と収集】

塩の道関係の文献資料の主なものについて以下に掲げた。特に真砂遠路氏の近著は、膨大な資料調査に裏付けられた好著で、今後の調査研究の貴重な足掛かりとなる。

『塩の道・南部牛追い唄の道を行く(1)』真砂遠路 2020年 非売品

『塩の道・南部牛追い唄の道を行く(2)』真砂遠路 2020年 非売品

『山形村誌』第1巻(民俗編)第3巻(通史編)2009—2015年『いわて旅街道』奥山淳志 2003年

『塩の道 野田街道』葛巻町観光協会・山形村観光協会 2002年

『有賀喜左衛門著作集3』大家族制度と名子制度—南部二戸郡石神村における 2000年

『鹿角市史第4巻』民俗編 鹿角市 1996年『鹿角民謡考』

『野田村誌 通史 史料』野田村 1992年

『南部牛方節』千葉治平 1991年

『三閑伊日記』平船圭子校訂 岩手古文学学会, 1988年

『葛巻町誌 第1巻』葛巻町 1987年

『岩手のあか牛物語』千葉明 1987年

『むかしの道 野田街道』野田村 1984年

『塩の道を探る』富岡儀八 岩波新書 1983年

『岩手県「歴史の道」調査報告 久慈・野田街道』岩手県教育委員会 1982年

『野田塩ベコの道』野田村史編纂委員会 1981年

『もりおか物語』10 盛岡の歴史を語る会 1979年

『塩俗問答集』渋沢敬三編 慶友社 1969年

『南部牛追い唄』山田野理夫 潮文社 1963年

『すねこたんばこ』1・2 平野直 未来社 1958年

このほかパンフレット、各団体の機関誌、会報などの各種資料も重要な文献としてデータベース化した。

「塩の道シンポジウム各種資料」岩手県盛岡広域振興局農政部「塩の道 P R チラシ」盛岡広域振興局経営企画部、「野田塩 ベコの道」関連観光パンフレット類、「広報 くじ」2018.9.1・2016.6.1・2015.8.1・同7.1. 各号。

【資料と聞き書きから】

「いわて塩の道」は現在の野田から盛岡に至る道だけでなく、複数存在したことがわかるが、その中で「野田街道」が大動脈となった理由は、本街道が塩だけでなく沿岸の砂

鉄、海産物と内陸の米、農作物とを交易する物流の豊富さ、盛岡だけでなく鹿角、さらには盛岡を過ぎて沢内から奥羽山脈を抜け、新潟に至るまでの複数かつ長大な交易路を形成していたこと、八戸から南部を経て盛岡に向かう街道の一角を占めていたこと、さらには現在の山形に代表される牛方の能力が高かったことが大きく影響したものと思われる。

『鹿角市史』によれば野田鉄は牛の背に付けやすいように加工された粗鉄、延鉄で、尾去沢銅山での銅採掘需要と鹿角鎌に代表される丈夫で軽い農具に加工されて、遠く津軽や仙台まで売り出されていたという。

また、野田街道を行き来した牛は非常に能力が高く、特に新潟方面に牛そのものを売っていたという。中越の燕・三条を中心とする金属産業の礎を築いたのも野田鉄が移入されてからと言われ、鉄を運搬した牛もその能力を看板に、彼の地で販売してくるという方法がとられた。

高低差のある山道を滞りなく荷駄を運ぶためには、牛がお互いの優劣を自覚していることが必要とされ、最強牛を先頭に立てると後続の牛は従順にその牛に従った。闘牛はそのため必要な仕事であった。

新潟県長岡市の山古志などに闘牛文化が栄えたのは、山形村の牛方が持ち込んだとされる。

塩の道は、岩手県内だけでなく、鹿角、新潟といった広域交流圏を作りながら、発達してきたということになる。

4 今後の具体的な展開

「野田街道塩の道」についての、関係文献の精査検証を行い、本交易道を有機的に検証、活写する。具体的には「野田街道塩の道」の歴史的産業的意義を再検証すること。「塩の道マップの作成」それによって塩の道の持つ歴史的意義が裏付けられ、地域において塩の道の認知度が向上するとともに、所縁を持つ食文化や風俗を活用した商業活動の活発化や広域連携、観光への活用による交流人口の増加、地域の活性化に寄与することを期す。

塩の道マップの作製。野田街道沿線住民の認知度向上による、故郷への愛着と関心を喚起すること。歴史的意義の再検証によって関連史跡や資料等の保全を推進すること。地域における知識の向上と生涯学習活動での活用を期すること。観光資源としての活用と交流人口の増加によって地域活性化に寄与すること。塩の道を活用した、地域の食(塩、短角牛、豆腐など)に係る新商品開発、宣伝効果、販売拡大による生産地の活性化に寄与することを目指す。

5 その他(参考文献・謝辞等)

本研究に協力いただきました、「いわて塩の道」関係者の皆様に御礼申し上げます。